沖縄県立看護大学紀要第５号(2004年３月)

総説

質的研究の看護学領域への展開

―社会調査方法論の視点から―

岡村　純[1)]

人間を対象とする学問においては、近年、質的研究が世界的に注目されているが、その概念や評価基準について統一的な考え方が確立されていない。そこで、社会調査方法論の発展との関連において、看護学における質的研究についてその概念や評価枠組み、代表的な方法の特徴と使用にあたっての留意点を文献的に検討した。その結果、看護学領域における質的研究は、⑴その概念を①研究対象の一つひとつを事例として重視する、②事例をその存在するコンテクストから切り離さない、③事例を事例自身の表現する（あるいはした）テクストによって記述する、④テクストの意味を研究者が研究対象の内面に入り込んで解釈し、理解する、と暫定的に設定でき、⑵看護実践の特性―①患者や住民のひとり一人を大切に扱い、②その表現する訴えや要望を受け止め、③それらの表現の背景にある文化的あるいは地域社会的コンテクストを理解し、④ケアや指導を実践し、⑤患者や住民の満足度に基づいてそれらの実践を評価する―と親和性が高く、⑶確実性：第三者がテクスト解釈を追体験でき、類似の事例を追試できる、信憑性：あるコンテクストにおけるテクスト解釈が信用できる、転用可能性：あるコンテクストにおいて得られたテクスト解釈が他のコンテクストに転用できる、現実との関連性：現場の問題の解決にその研究結果が関連する、から評価できることが明らかになった。
キーワード：質的研究、確実性、信憑性、転用可能性、現実との関連性

Ⅰ　はじめに―質的データの分析から質的研究へ―

グラウンデッド・セオリーやフォーカス・グループ・インタビューがいわば「流行」と化している日本の看護学領域[1),2)]だけでなく、人間を対象とする多くの学問においても量的研究の方法では扱えない研究上の問いの多いことが認識され、世界的に質的研究が注目されている[3)]。

日本の社会学、とくに社会調査方法論の領域においては、統計的調査法と事例的調査法との対比という形で、質的研究の意義や有効性が古くより論じられてきた[4)]。この論争のなかで、見田は質的データが有する固有の特徴として①追体験的な了解可能性、②総合的・多次元的な把握、③変化のプロセスや変化の方向性に関する動的な把握、を提示した[5)]が、この問題提起は質的研究の実践、展開へとは必ずしも結びつかず、数量化理論の普及とともに、質的データを数量化して分析する量的研究が増えたと回顧されている[6)]。しかし、近年、質的研究における一つの方法であるフィールドワークに注目が集まっている[7)]。

そこで、本論においては、看護学領域における質的研究の実践とその展開を社会調査方法論の発展との関連において明らかにするため、①本論における質的研究の概念設定、②質的研究の評価枠組み、③代表的な質的研究方法の特徴と使用にあたっての留意点、の順に検討を進めた。

Ⅱ　質的研究の概念

質的研究の概念をどう規定するかについては、研究者やその方法論的基盤、時代によって様々である[8)]ので、アプリオリに概念設定を行なうことは困難である。ここでは、主として社会学分野と看護学分野での文献をレビューすることによって、質的研究の新しい概念規定を試みたい。

１．社会学における質的研究の概念－量対質論争から意味解釈法へ

日本の社会調査の分野では、見田が①質的データによって導かれた仮説を量的データによって実証する、②量的データによって実証された統計的な関連を質的なデータによって了解する、という提案[9)]を行なったこともあり、「質的分析」の名のもとに、仮説を抽出できる質的データを収集できる質問紙法や指示的面接法の精緻化[10)]、質的データの統計的処理[11~12)]に関心が向かうことになった。このような展開のなかで社会調査のテキストの多くは量的調査、統計的手法で占められる[13)]ようになり、質的調査は各手法ごとにまとめられることが多くなっている[14~24)]。このような傾向はアメリカでも同様であり、例えばBabbie ERのSURVEY RESEARCH METHODS[25)]は量的調査研究しか扱っていないし、質的調査法に

１）沖縄県立看護大学

関して日本語に翻訳されたものを含めて多く出版されている[26～34]。なお、質的、量的の両方に目配りしているテキストもあり[35～37]、例えば、事例的調査の活用法を①個性記述的、全体関連分析方法、②仮説の探索、調査内容の確認の予備的調査、③統計的調査結果の確認手段、の三つにまとめている[38]が、①の個性記述的・全体関連分析方法が質的研究に該当する。

以上のように、社会学分野では、質的調査法は各手法をまとめて議論することが少ないので質的研究の概念は明確にはされていないが、意味解釈法（あるいは意味解釈的方法）として学問的地位を確立しており、高坂と与謝野は社会学における代表的な方法として意味解釈的方法、数理的方法、計量的方法の三つをとりあげ、質的研究に該当する意味解釈的方法に共通する特徴として①データに密着する過程で理論を発見する、②対象がことばを通して与えている「意味」を重視する、③生活世界における対象者の体験や使用言語、知識をすくい取る[39]、をあげている。今田も社会学研究法を意味解釈法、統計帰納法、数理帰納法の三つに整理し、意味解釈法を、リアリティを把握するために個別の（特殊な）事例をとりあげ、その意味解釈によって現象の本質認識にせまる方法[40]としている。

日本以外でも、看護領域に近い分野での業績が多い社会学者の間では質的研究の評価は確立しており、グラウンデッド・セオリーで著名なStrauss AとCorbin Jは質的研究の特徴を①統計的処理あるいは数量化のための手段によっては到達し得ない結果をもたらす、②個人の生活、できごと、行動、さらには人々の相互行為、組織の機能、社会の変動を対象とする、③様々な手段で収集されたデータから結果を導き出すために非数学的分析の手順をとる[41]、と羅列している。ベルリンのアリス・サロモン応用科学大学看護管理学部で実証看護研究（質的研究）を担当するFlick Uは、ドイツ語圏での質的研究の発展の歴史、アメリカでの質的研究の歴史的展開を踏まえて、質的研究の学問的立場を①具体的な事例を重視する、②事例を時間的、地域的な特殊性のなかでとらえる、③事例となる人々の表現や行為に立脚する、④人々が生きている地域的なコンテクストと結びつけて理解する[42]、と規定している。

２．看護学分野における質的研究の概念－コンテクストを踏まえたデータ解釈

看護研究の領域では、Leininger MMが、質的研究法を研究する現象の特異的・文脈的・ゲシュタルト（全体構造）的特徴の属性・パターン・特質・意味を観察、記録、分析、解釈する方法および技術[43]として要約しており、Polit DFとHungler BPは、質的データの分析のなかで、質的研究を①行為者自身が表現するままの経験を記述することを前提とする、②複雑な人間と環境を全体論的にとらえる[44]、と簡単にまとめている。Patton MQは、質的方法は①深く掘り下げた自由面接、②直接観察、③書かれたドキュメンツ（調査票の自由記入、個人の日記、プログラムの実施記録を含む）という三つの種類のデータ収集より構成される[45]としている。以上、質的研究としてはいずれの概念も社会学分野に較べて部分的な規定であった。

1990年代後半に入っての質的研究の隆盛とともに概念の明確化が進み、Holloway IとWheeler Sは質的研究の主な特徴として、①対象とする環境のなかで生活する内部者としての視点を持つ、②研究者が対象とする場と文化に溶けこみ、主体的にかかわる、③データから理論的な枠組みを導き出す、④できごとや行為を社会的コンテクストのなかで解釈して記述する、⑤研究者と対象者とは基本的に対等な関係である、⑥データの収集と分析の過程は相互に影響し、修正される[46]、という点をあげ、質的研究のガイドラインを明らかにしている。Pope CとMays Nも質的研究の特徴を①社会現象をそれにかかわる人々の認識に基づいて解明する、②自然のまま（人工的あるいは実験的ではなく）の場で人々を調査する、③複数の異なる方法を併用したり、複合的な方法を用いる場合が多い[47]、としている。

看護研究のテキストにおいては、LoBiondo-Wood GとHaber Jが編集した『看護研究―方法、批判的評価、利用』のなかで、Cohen MZは質的研究の特徴として①数量よりもテクスト（文字データ）を扱う、②テクストの内容を分析する[48]、をあげ、Liher PRとMarcus MTは看護における質的研究は①看護の科学と技を結びつける、②人々の日常の場に研究者が参加するものである[46]としている。Norwood SLは質的研究のパラダイムとして①リアリティは流動的で、個人個人で異なり、②ある与えられた状況やコンテクストにおいてのみ意味をもつ[50]、をあげている。いずれのテキストも技法あるいは研究的立場のみに偏っており、質的研究の概念としては不十分である。

なお、舟島は質的研究について質的データを扱う研究とし、質的データを手紙や日記などの個人ドキュメント、世間話やビラなどの社会状況に関する記録、参与観察や面接などの記録など、多次元的な要因が絡みながら顕現している具体的な事例記録に限定している[51]が、統計学の進歩により質的データを数量的に扱うことも可能になっているので、「質的に扱う」を強調する必要がある。また、このような質的データと量的データの相互変換をもって両者を区別する必然性は消滅したという見解[52]も存在するが、たとえ比率尺度のデータをその分布から機械的に名義尺度のデータに変換しても、その名義尺度による分類に研究者が質的に異なる意味をもたせない限りにおいては、質的データとして扱っていることにはならないと考えられる。

３．本論における質的研究の規定

以上の検討を踏まえて、本論では質的研究を①研究対象の一つひとつを事例として重視する、②事例をその存在するコンテクストから切り離さない、③事例を事例自身の表現する（あるいはした）テクストによって記述する、④テクストの意味を研究者が研究対象の内面に入り込んで解釈し、理解する、という研究方法論として規定する。

Ⅲ　質的研究の評価基準

１．量的研究の再現性から質的研究の確実性へ

質的研究の概念と同様に、質的研究の質の評価や評価基準についても様々な考え方や見解があり[53]、量的研究の古典的な評価基準を厳密に適用すべきであるという意見から質的研究の概念に適合した新しい基準が必要であるとする議論まで幅が広い[54]。量的研究の古くからの評価基準に信頼性と妥当性があるが、古典的な信頼性－同じ方法を用いれば全く同じデータがいつでも得られるという再現性については既に「ドンキホーテ的な信頼性」として排除[55]されており、Pope C と Mays N も質的研究の対象となった状況の再現が困難であったり、その状況が社会変動の影響を受けている場合には再現性は無意味である[56]としている。さらに、研究対象となった現象の測定や観察結果が時間的経過のなかで安定するという「通時的信頼性」は、質的研究の対象の多くが時間の経過とともに変化するという理由によって排除し、同一時点で異なる方法によるデータ収集を行なった場合にその結果が恒常的である、あるいは一貫性があるという「共時的信頼性」を提案している[57]。

共時的信頼性を高めるためには①研究対象の表現したテクストと研究者の解釈が識別できるようにデータの成立過程を明確にすること、②データ収集やテクスト解釈の方法を明示すること、が要請され、このことによってテクストと研究手続きの「確実性 dependability」が検証される[58]。テクスト解釈の再現性を検証する実験的な試みも行なわれてはいる[55]が、質的研究が研究者個人の解釈と理解を前提とする限り、上記①②の条件が満たされることによって、読者がテクスト解釈を追体験でき、研究者が類似したコンテクストの事例を追試できるならば、質的研究として十分な評価は与えられると考えられる。

２．量的研究の内的妥当性から質的研究の信憑性へ

量的研究で用いられる内的妥当性（測定あるいは観察された結果がコントロールされない交絡変数の影響を受けず、独立変数によってもたらされたと推定できる程度）の概念は、研究対象からそのコンテクストを切り離さない質的研究においては、コンテクストの影響を考慮したテクストの解釈がどれだけ信用できるかという「信憑性 credibility」に書き換えることができる。信憑性を高める一つの方向性は、テクスト解釈の信憑性を高めるためのトライアンギュレーション、分析的帰納、ピア・ディブリーフィングなど[60～61]である。

解釈の信憑性を高めるためのトライアンギュレーションには、「理論のトライアンギュレーション」があり、これは様々な理論的立場を並行して用いることによって様々な視点や仮説を考慮に入れたデータへのアプローチ、テクストの解釈を検討する方法である[62]。分析的帰納は、データからテクストを解釈する作業仮説を立て、この仮説にそれぞれの事例やデータがあてはまるかを検討し、仮説に否定的な事例があれば作業仮説を修正する、というプロセスを繰り返すことによって、テクスト解釈の信憑性を高める方法であり[63]、飛び離れた事例の検討[64]と呼ばれることもある。ピア・ディブリーフィングは、研究に直接関与していない人と当該の研究について定期的にミーティングをもつことによって、研究上の盲点を発見したり、テクスト解釈の問題点を指摘してもらう方法である[65]。

信憑性を高めるもう一つの方向性は、テクストそのものの信憑性を高めるためのトライアンギュレーション、面接状況のチェック、コミュニケーションによる妥当化などである[66]。テクストそのものの信憑性を高めるためのトライアンギュレーションには、「データのトライアンギュレーション」「調査者のトライアンギュレーション」「方法のトライアンギュレーション」があり、データのトライアンギュレーションはデータ収集を異なる時点や場所で行なったり、様々な人から収集する方法、調査者のトライアンギュレーションは研究者の個性から生じるデータの歪みを避けるために複数の観察者あるいは面接者を調査に参加させる方法である[67]。方法のトライアンギュレーションには方法内トライアンギュレーションと方法間トライアンギュレーションがあり、前者は同一方法内で違う視点からデータ収集を行なう方法（例えば、同一質問紙において同じ質問項目を複数の異なるワーディングで実施する）、後者は複数の異なる方法によるデータ収集（例えば、同じ質問項目を質問紙法と半構造化面接法で調査する）である[68]。

テクストの信憑性を高めるための面接状況のチェックはナラティブ・インタビューについて提案されたもので、ライフヒストリーに関する非指示的面接においては①語られた内容が正しいか、②語られたことは（話者の）社会関係に関して適切か、③語られたことは自己を誠実に表現したものであるか、のチェックが必要であり、面接対象者が具体的な面接状況において自分のものの見方に合わない表現を意識的あるいは無意識的にしてしまったことがないかが問われることになる[69]。ライフヒストリーにおける事実の検証の必要性については歴史学の分野でも以前より指摘されていた[70]ことである。コミュニケーションによる妥当化は、回答者による妥当化あるいはメンバーチェッキングとも呼ばれ[71]、研究者の記述したテ

クストが正確かどうかを対象者自身に確認してもらう方法である[72]。なお、かつてはコミュニケーションによる妥当化を研究者の行なったテクスト解釈にまで拡張する議論もあったが、研究者の解釈が対象者の目に触れることは研究倫理上問題があるということで、実施されなくなっている[73]。

３．量的研究の外的妥当性から質的研究の転用可能性へ

量的研究で用いられる外的妥当性（測定あるいは観察された結果が他の対象や状況に一般化できる程度）は、各サンプルのコンテクスト要因を無作為抽出によって捨象し一般化する概念であるので、事例からコンテクストを切り離さない点に意味のある質的研究では、あるコンテクストにおいて得られた解釈や理解が他のコンテクストにどの程度転用可能であるかという「転用可能性 transferability」[74〜75] に置き換えざるを得ないと考えられる。

転用可能性を高める方法としてはグラウンデッド・セオリー法の継続的比較と Weber M の系譜を引く理念型形成があり、前者は研究者がテクストを解釈してすでにコード化・分類した結果を常に比較参照し、コード・分類の修正を行ないながらコンテクストの異なる他の事例のコード化・分類を継続することによって他のコンテクストへの転用可能性を検証する方法である[76]。理念型形成は Weber M の理念型の考え方に基づいており、①個々の事例を比較対照して複数の事例をまとめるタイプを構成し、②このタイプを代表する純粋な事例（プロセス上の理念型）を見つけ出し、③個々の事例をこのプロセス上の理念型と対比して系統的に理解し、④タイプの再構成を行ない、個別事例のコンテクストを超えた構造（理念型）の理解を得る方法である[77]。

４．看護研究に必要な「現実との関連性 relevance」

質的研究の評価基準には確実性、信憑性、転用可能性以外にも、確実性を「読者が研究者の思考を追跡できるか」あるいは「研究者は研究のプロセスを記録しているか」という視点から監査する「監査可能性 auditability」[78〜79]、ナラティブ・インタビューにおけるテクスト（データ）の信憑性を示す「真正性authenticity」[80]、「得られた知見は当該の研究状況以外にも適用できるか」あるいは「研究結果は当該研究と関係しない対象にも意味があるか」というコンテクストの比較可能性を検討する「適合性 fittingness」[81] などがあり、また、確実性、監査可能性とほぼ同様の概念として、「確認可能性 confirmability」は、データとその出所となる資料が関連づけられ、解釈や結論がデータから直接導かれていることを読者が確かめられることである[82]。

これら以外の評価基準で、医療技術評価、看護研究の領域では「現実との関連性 relevance」（現場で実務に従事している人たちが直面している問題を解決するのにその研究結果が関連しているか）が重要であるとされており[83]、Corbin J と Strauss A も理論形成の評価基準の一つとして「分析の結果得られた理論は（現実に対して）有意義であるか」という問いを立てている[84]。

５．質的看護研究における評価基準

以上検討したように、質的研究の評価基準に様々な考え方があり、統一的見解は示されてはいないが、看護学領域におけるすべての質的研究には確実性 dependability、信憑性 credibility、転用可能性 transferability、現実との関連性 relevance が少なくとも必要であると考えられる。瀬畠らは、質的研究の評価基準として①質的研究を用いた理由を説明しているか、②適切な質的手法が選択されているか、③倫理的配慮がされているか、④対象者のクライテリアを示しているか、⑤対象者を選ぶ過程を示しているか、⑥具体的なプロセスが記述されているか、⑦Validity を確保する努力がなされているか、⑧データと解釈の区別が明確か、⑨結論の導き方が明快か、を提案しており[85]、基準の⑥と⑧は確実性、基準⑦は信憑性、基準⑨は転用可能性に該当すると考えられる。

Ⅳ　質的研究方法の特徴と留意点

１．質的データの収集方法

質的データは口頭データ、視覚データ、ドキュメントデータに分類することができ、口頭データは半構造化面接、ナラティブ法、グループ・インタビューなどによって収集される。視覚データには参与観察によるデータ、写真データ、映像データなどがある。

⑴　半構造化面接

量的研究における面接は、面接者の技術やパーソナリティが面接結果に影響しないように、インタビュー・ガイドと質問紙が事前に指示されるので指示的面接と呼ばれ、質問紙が面接対象者の意識に一定の構造があることを前提として設計されるので構造化面接とも称されるのに対して、質的研究では面接の手続きが標準化されていないことが多く、面接者が臨機応変に質問を行なうことから非指示的面接、あるいは面接対象者の意識や行動様式の構造を前提としていないことから非構造化面接と呼ぶ[86]。半構造化面接はインタビュー・ガイドと質問紙（自由回答を求める質問）を用いる指示的面接と非指示的面接の中間的な形態ではあるが、完全な非指示的面接（自由面接）にデータの確実性を高めるために統制を一部加えるという点を考慮すると、非指示的面接の一種に分類することもできる。半構造化面接には、焦点面接法、問題中心面接、専門家面接、エスノグラフィック・インタビューなどがある。

焦点面接法は、本来は面接対象者に同一の刺激（ある映画やラジオ番組など）が与えられた後に、その刺激が対象者に及ぼした影響をインタビュー・ガイドに基づいて調査するメディア研究の方法であったが[87]、現在では

「一定のサンプルについて調査を行ない、その分析が終った後に、さらにそのなかから有意的にサンプルを取り出し、面接手引によりながらより詳細に面接するもの」とされ、インタビュー・ガイドには仮説のあらましが書かれ、調査対象の主観的経験（ある状況に対する態度や情緒的反応）に焦点を合わせるとされている[88]。詳細なインタビュー・ガイドによってデータの確実性は確保されているが、映画やラジオ番組による刺激を用いた面接は半構造化面接としては特殊であり、純粋な形での適用はほとんどなされていない[89]。ただし、既存研究が少なく、作業仮説が立てにくい研究対象に対しては、一つの有効な方法であると考えられる。

問題中心面接は、研究対象とする特定の問題に関するキー・クエスチョンをインタビュー・ガイドで準備することによって、ナラティブが行き詰まったり、ナラティブの筋が研究のねらいからそれた場合に介入する面接で、面接前に簡単な質問紙調査を行ない、面接後記を必ずつけるところに特徴がある[90]。この方法は、ナラティブへの介入時期が面接者の恣意に委ねられることや事前の質問紙調査が調査対象者のナラティブに影響する可能性があることから、質的研究としての確実性は低いと考えられる。

専門家面接は、調査対象者を特定の実践の場における専門家グループの代表者に限定し、他の半構造化面接よりも指示的役割の強いインタビュー・ガイドを用いるもので、このガイドによって面接者が当該の問題についてある程度知っていることを対象者に認識させ、面接がわき道にそれるのを防ぐ方法である[91]。この面接は専門家個人の知識や経験を調査するものではなく、専門家としての知識（専門知）が対象となるので、面接対象者の代表性が問われることになり、サンプリングの方法によっては転用可能性の低くなることが考えられる。

エスノグラフィック・インタビューは、参与観察などのフィールドワークと組み合わせて用いられる面接法で、フィールドで発生する自然で日常的な会話を面接の形式に移行させるために、調査対象者に対してエスノグラフィーのための説明、とくに面接に関する説明（なぜ［面接という］特殊な形式で話をするのかを明らかにする）を行なうものである[92]。また、データの日常性を確保するために、面接対象者が回答できなかったり、回答に詰まった場合には質問を打ち切る、掘り下げないことによって、対象者の日常的な表現を収集する手法がとられることもある[93]。エスノグラフィック・インタビューはフィールドワークと合わせて実施されるので、その評価を単独で行なうことは困難であると考えられる。

⑵　ナラティブ法

ナラティブ法は、質問－回答形式の面接で面接対象者の主観的経験を十分に明らかにできるか、という疑いから出発しており、代表的なものにナラティブ・インタビューがある。ナラティブ・インタビューはライフヒストリー研究で使われる方法で、面接者は最初のナラティブ生成質問で面接対象者に何を語るべきか焦点を絞らせ、語り始めを促し、ストーリーの終りの合図が出るまで口をはさまず、その後、あいまいな部分に関して追加的に質問を行なうものである[94]。

実際のライフヒストリー研究では、面接者の発語が非常に少なく、わずかな相槌や事実確認のための短い追加質問だけでナラティブの進行する「問わず語り型」だけでなく、面接者の質問によってナラティブの流れがつくられる「問いかけ語り型」[95]も実施されており、後者の質問は①導入的質問、②フォローアップ質問、③探索的質問（ナラティブのさらなる展開を促す）、④明確化質問、⑤直接的質問（語られなかったことについて面接の最後で質問する）、⑥間接的質問（直接には聞き難いことを他者についての意見や一般論として質問する）、⑦ストーリー化質問（対象者が意見を述べたことについて対象者の体験のストーリー化を促す）、⑧沈黙（対象者が連想や内省する時間を確保する）、⑨解釈的質問（話を繰り返すことによって意味を確認する）に分類される[96]。ナラティブ・インタビューには、すべての人々がナラティブを得意とするわけでないので対象者が限定されることや、ナラティブの信憑性を高めるためには面接の確実性だけでなく、別の方法による事実確認が必要とされることなどの問題点が考えられる。

⑶　グループ・インタビュー

指示的面接における面接者と面接対象者の相互行為(質問－回答）は、日常的相互行為とかけ離れており、タブー視されるようなトピックに関する意見や態度を調査する場合には日常的な相互行為により近いグループによるディスカッションを利用するほうが適切であることが指摘されており、グループ・インタビューなどが用いられている[97]。フォーカス・グループ・インタビューは、具体的な状況に即したある特定のトピックに関して、選ばれた複数の個人によって行なわれる形式ばらないグループ・ディスカッションの方法であり、面接者が司会者として詳細なインタービューガイドを用いて特定のトピックについての面接対象者の理解や感情、考えを引き出すものである[98]。

フォーカス・グループ・インタビューの信憑性を高めるために、①対象者の個別背景の検討、②相互作用による対象者の考え方の変化についての記録、③対象者の偏りの検討、④対象者のドロップアウトの予防、⑤面接者(司会者）による影響の除去、⑥面接者（司会者）自身の経時的変化の検討が提案されており[99]、確実性を高めるためのインタービューガイドや逐語録・観察記録・分析ノートも公開されている[100]が、転用可能性の向上についてはグループダイナミックスの一回生起性・複雑性から困難が大きいと考えられる。なお、グループ・インタビューはフォーカス・グループ・インタビューとほぼ同義的に使用されるが、選ばれた個人あるいは複数の個

人による人工的なグループだけでなく、現実に存在するグループも対象に含めるより広い概念であり、共同ナラティブは対象を家族に限定するグループ・インタビューである[101]。

⑷　参与観察

参与観察は、①調査者が調査地において現地の社会生活に参加しながら、②対象者と同じような立場で現場に起こるできごとを観察し、③直接観察できないできごと(過去に起こったことなど）に関しては対象者に面接する方法である[102]。参与観察は①描写的観察（焦点を絞らない非特異的な描写を行ない、フィールドの複雑性を全体的に把握し、具体的な問いと視点を発展させる)、②焦点観察（研究上の問いに関連するプロセスや問題に視点を絞る)、③選択的観察（焦点観察で見つけた典型的な行為やプロセスの証拠や実例を探す）の段階を踏み[103]、「観察者としての参与者」(観察者が調査を目的として当該のフィールドにいることは対象者に知られており、準メンバーとしての役割が与えられる)[104~105] に徹して「ゴーイング・ネイティブ」(観察者がフィールドのなかに取り込まれ、フィールドで共有されている見方を鵜呑みにする）に陥らないことが必要とされる[106]。

参与観察の確実性を高めるためには「網羅的なフィールドノーツ」(その日一日にフィールドで起きたできごとをその順番どおりに時間を追って網羅的に記録する)[107] をつけることが重要で、観察の信憑性の向上には観察で見出された対象者の発言や活動が対象とするフィールドで一般的に観察できるかどうかをチェックすることで観察者の介入の影響を考慮することが提案されている[108]。参与観察には一般に長時間の観察が必要とされるが、看護職者が臨床現場で行なう場合には自らがフィールドの一員であるために、描写的観察の段階を短縮することはできる。しかし、逆に重要なできごとや活動を当たり前のこととして見逃してしまう危険性があることに留意する必要がある[109]。

なお、エスノグラフィー（民族誌的アプローチ）はフィールドワークとエスノグラフィック・インタビューを併用した方法で、前者の主要な手法は参与観察であるが、エスノグラフィーと関連して、フェミニストの立場に立つ研究者が、対象とする日常生活の場に参加、観察、面接を行ない、記録するという行為に基づき対象を分析、記述していく方法をフェミニスト・エスノグラフィー[110]、女性の多い看護職の現場に女性の立場からアプローチする方法をフェミニスト・アプローチ[111] と呼ぶこともある。また、子どもの行為のように、変動するコンテクストに常に拘束され、道具や他者に媒介され短時間のうちに変化するマイクロジェネティック・データを収集するフィールドワークをマイクロ・エスノグラフィー[112] と呼ぶこともある。

⑸　写真データの収集法

カメラを使用したデータ収集には、従来、写真をデータとして収集する方法（調査者による撮影と調査対象者からの収集を含む）と、写真を利用してデータを収集する方法があり、後者の代表例としては写真誘い出し面接があり、調査対象者に写真のテーマを指示して撮影させ、その写真をナラティブや質問への回答を引き出すきっかけとするものである[113]。

フォトボイス photovoice は、住民が一定のテーマで写真を撮影し、その写真に「ボイス」(テクスト）を付けグループ・ディスカッションすることによって、課題を共有化し、解決方法を住民自らが発見するという参加型アクションリサーチアプローチ[114] で、質的なコミュニティアセスメントとしての応用可能性が論じられている[115]。写真データの問題点として写真に表現された被写体の偏りが指摘されている[116]が、フォトボイスにおけるグループ・ディスカッションはある種のコミュニケーションによる妥当化であり、テクスト（ボイス）の信憑性が高められると考えられる。

⑹　映像データの収集法

AV 機器を使用したデータ収集には、調査者が撮影によって映像データを収集する場合と既存の映像データ(映画、テレビ番組など）を利用する場合があり、前者の代表例としてはエスノメソドロジー、後者の代表例としては映画分析がある。エスノメソドロジーは日常生活において人々がお互いの行為を解釈し、意味づけ合う過程を対象とし、テレビ視聴場面や授業場面などの特定の社会的コンテクストを研究主題とすることが多く、このようなコンテクストにおける調査対象者の「ありのまま」の相互行為を据えつけたビデオカメラで記録することになる[117]。カメラの台数を増やすと調査対象者に影響が出るので、(方法のトライアンギュレーションとして）非参与観察を併用することによって、データの信憑性が高められる。

映画やテレビ番組は、フィクショナルな映像データとして、「ありのまま」が記録されることが稀な逸脱現象(体罰やいじめなど）を研究する場合に使用されることがあり[118]、ハリウッド映画において描かれたアルコール依存症やベトナム戦争を映画分析した例[119] がある。

⑺　ドキュメントデータの収集法

ドキュメントデータは主として生活史研究と構築主義研究の領域で使用されており、前者の領域ではライフドキュメント（生活記録）と呼ばれ、自伝、伝記、自分史、日記、手紙、手帳、遺書、写真が含まれ、これらは調査対象者の内面を深く理解することを可能とする個人的記録であると同時に、社会生活への参加者としての社会的記録でもある[120]。これら以外にも、Plummer K は「ゲリラ的ジャーナリズム」(記者が様々な生活の記録を注釈を加えず、読者に提供する)、「事実の文学」(作家が生活上の実際のできごとを調べて分析し、それらに文学的なストーリーを盛り込んで小説化する)、記録映画、個人の所有物（収集品など)、(研究者自身の個人的な経

験に関する）自己観察をあげている[121]。ライフドキュメントデータの信憑性を示すためには、記録者の意図やバイアス、記録したできごとと記録者の時間的・空間的関係などを検討する必要がある[122]。

構築主義では社会問題や逸脱にかかわる社会的カテゴリー（いじめ、不登校など）を主題とすることが多く、それらの問題やカテゴリーは、「客観的な状態」として存在するのではなく、苦情や異議を申し立てる個人やグループの活動によって構築されると考えるので、新聞記事や行政機関の内部資料、答申、記者会見での発表、意見広告、投書、調査報告書、研究論文などがドキュメントデータとなる[123]。

２．質的データの解釈方法

質的研究においては、質的データ、調査対象者の表現したテクストの解釈が中心となる作業であり、その解釈方法として、大量のテクストを圧縮し、理論開発をするためのコード化、カテゴリー化と、テクストをその時間的連続性を考慮して再構成するためのシークエンス分析がある。前者にはグラウンデッド・セオリー法における理論的コード化、テーマ的コード化、質的内容分析など、後者には会話分析、ナラティブ分析、客観的解釈学などがある。

⑴　理論的コード化（グラウンデッド・セオリー法）

グラウンデッド・セオリー法におけるデータ解釈は、サンプリング、データ収集と、同時並行的、相互規定的に進められ、データに基づいた理論の開発を目的としているので、理論的コード化と呼ばれることがある[124]。理論的コード化はオープン・コード化、軸足コード化、選択的コード化の三つのプロセスから構成され、同時並行的に実施はされるが、総体的にみれば分析の初期段階ではオープン・コード化が多く、最終段階では選択的コード化が多くなる[125]。

オープン・コード化は具体的なテクストを抽象的な概念の形で表現するためのコード化であり、①テクストデータを文節ごとに分割し、意味の単位ごとに分類して、概念をつける、②得られたいくつかの概念をまとめ、カテゴリーを形成して、より抽象度の高い名前をつける、③カテゴリーの特性を抽出し、特性を連続線状となる一次元上に位置づける（次元化）、という手順で実施される[126]。コード化にあたっては、基本的な問い－①誰が、②いつ、③どこで、④何を、⑤どのように、⑥どのくらい、⑦なぜ、を常に立てることによって、テクストのより深い解釈が可能となる[127]。

軸足コード化は、オープン・コード化によって形成された諸カテゴリー間の関係を明らかにするために、研究上の問いに最も関連し、そのカテゴリーの内容をさらに掘り下げるための軸（足）となるカテゴリーを選び、軸足カテゴリーとその他のカテゴリーとの関係を、帰納的な思考と演繹的な思考を繰り返すことによって明確化・確立することである[128]。軸足カテゴリーと関係づけられ、特定化されたものはサブカテゴリーと呼ばれるが、この軸足コード化にあたっては、原因となる条件→現象→コンテクスト→介在する条件→行動／相互行為の戦略→結果、というパラダイム・モデルが使用され、各カテゴリーはこのモデルの要素として位置づけられる[129]。

選択的コード化は、軸足コード化の抽象化レベルをさらに高めて諸カテゴリーを統合し、グラウンデッド・セオリーを生成するプロセスで、一つの中核となるカテゴリーを選択し、パラダイム・モデルを活用しながら中核カテゴリーの特性と次元を検討することによって、それ以外のカテゴリーを中核カテゴリーと関連させて統合し、中核カテゴリーとして記述された現象（ストーリー）の発生に関する理論を開発することである[130]。実際的には、①ストーリー・ラインを明らかにする、②パラダイム・モデルを用いて中核カテゴリーにサブカテゴリーを関係づける、③それぞれの次元で諸カテゴリーを関係づける、④テクストと照合して②、③での関係の妥当性を検討する、⑤さらなる検討が必要なカテゴリーやパラダイム・モデルに足りないカテゴリーを埋める、というステップを行きつ戻りつする[131]。コード化の最終段階では、ストーリー・ラインと諸カテゴリー間の関係を検証し、十分に発展していないカテゴリーを充実するために、理論的飽和（①カテゴリーを生み出す新しいあるいは重要なテクストが存在しない、②パラダイム・モデルのすべての要素においてカテゴリーが緻密である、③諸カテゴリー間の関係が十分に精緻化され、妥当性が十分に検討されている）に到るまで限定的サンプリングを続け、理論を形成する[132]。

グラウンデッド・セオリー法については、理論的サンプリング（理論構築に重要であることがコード化の過程で証明されたカテゴリーを表現している現象をサンプリングする[133]）と理論的飽和によって転用可能性が高められ、概念、カテゴリーとコード化の過程が明示されることによって確実性があるという評価がある[134]。確実性に関しては質的調査を可能な限り言語化し、データの解釈過程において「より閃きやすい環境整備」をする[135]、データの質的分析の手法化・明示化という評価[136]もなされている。一方、この方法については批判も多く[137]、Flick Uは研究方法と「わざart」の境界が見えにくく、実行してみないと理解できないという問題点を指摘した[138]。この点に関してはグラウンデッド・セオリー法を用いた看護研究のプロセスの実際例[139]が公開されているのでほぼ解決されている。

日本においては質的研究としての確実性が研究手続きのマニュアル化として誤解され、細部まで再現することにこだわり過ぎている部分があるが、コード化の対象をどこまで広げるか、理論サンプリングをどこで終了させるか、理論的飽和を何で判断するかなど、研究者の独創

性や意思決定に任されている部分があり、一種の研究者によるトライアンギュレーションであるグループワークによる意思決定[140]や研究対象とする現象を狭く限定したスポット型グラウンデッド・セオリー[141]など、研究者独自の試行を明示して研究を進める必要があると考えられる。グラウンデッド・セオリーがその対極に位置づけたグランド・セオリーの代表格であるParsons Tの行為理論は、その後の体系的な社会理論の低迷によって再評価（「パーソンズ・ルネサンス」）され[142]、グラウンデッド・セオリー法の理論形成力が問われており、理論的感受性の高い研究者による応用が望まれている[143]。

⑵　テーマ的コード化

テーマ的コード化は、理論的コード化の方法を基盤として社会集団の比較研究のために開発された方法で、事例研究を基本としており、①ある集団における個々の事例の短い描写（面接での典型的発言、対象者の簡単な描写、対象者が語った中心的なテーマなど）を作成する、②最初の事例の分析から研究テーマに関するカテゴリーの構造（関連）図を作成する、③この構造図を複数の事例で確認した後、残りすべての事例に適用できるように修正する、④修正された構造図を別の集団の事例に適用し、対象となった諸集団間の類似点・相違点を検討する、という手順を踏む[144]。テーマ的コード化は特定のテーマに関して社会集団それぞれの特徴や個々の事例の特殊性を比較できる方法ではあるが、その転用可能性は低く、その研究から導き出された結論は対象とした社会集団に限定されると考えられる。

⑶　質的内容分析

内容分析はもともと新聞記事内容の量的分析から発展した方法[145～146]で、既存の理論的モデルに由来するカテゴリーを用いて膨大なテクストデータを圧縮するという特徴があり、①対象とする資料を定義し、適切なテクストを選択する、②データ（資料）収集の状況を分析する、③資料の形式上の特徴を確認する、④選択したテクストについて分析の方向性、解釈の対象を定義する、⑤理論的モデルに基づいて研究上の問いを細分化し、定義する、⑥分析技法（要約的内容分析、説明的内容分析、構造化内容分析）を定義する、⑧分析に用いられるテクストの単位を定義する、⑨実際の分析を行なう、⑩分析結果を細分化した問いと照合する、という手順で行なう[147]。要約的内容分析は重要でないテクストや言い換えを削除し、同じ意味の言い換えを一つにまとめる技法、説明的内容分析はあいまいなテクストや矛盾するテクストを辞書の定義を活用したり、新しい定義をつくって「説明的な言い換え」を行なう技法、構造化内容分析はテクストをある次元で尺度化して構造化する技法である[148]。

質的内容分析は実際のデータからカテゴリーを生成するのではなく、既存の理論的モデルのカテゴリーを使用するので、テクストの解釈においてそのコンテクストが切り離される危険性が大きく、量的研究への志向性の強さ[149]ゆえに、逆に質的研究としての信憑性が低下することが考えられる。

（4）会話分析

会話分析は、日常的な会話がどのように行なわれているかという形式に焦点をあてる方法として開発されたが、カウンセリングにおける会話、医師と患者間や裁判などの特定のコンテクストにおける会話にも応用されており[150]、この分析の結果は看護職者－患者間、看護職者－その他の保健医療職間の相互作用に変化をもたらすことが指摘されている[151]。その手順は、①会話の秩序を成り立たせていると考えられる一つあるいは一連の発話を特定する、②この発話が見られる会話を収集する、③この発話が相互行為としての会話にどのような秩序を与えているかを明らかにする、④このような秩序を成り立たせるための制度的なコンテクストやより一般的なコンテクストを分析する、から成る[152]。

会話分析は、会話の形式面のみに注目するために、発話者の意思や主観的意図は捨象され、発話の個々の意味が会話全体の大きなコンテクストから切り離される危険性をもっていることに留意する必要があり、特定のコンテクストにおいて構築された社会関係（例えば、病棟での看護職者－患者間関係）の分析にのみ適用すべきであると考えられる。

⑸　ナラティブ分析

ナラティブ分析には大きくは二つの立場があり、一つは即興の自伝的ナラティブは過去の経験を正確に再現したものであるという前提に立ち、①テクストから即興の自伝的ナラティブを選び出す、②ナラティブを分割し、その構成を記述する、③ライフストーリー形成に優勢なプロセス・パターンを明らかにする、④以上の手順を適用した他の事例と比較・対比する、という手順を示している[153]。これに対して、もう一つはナラティブには人生の主観的かつ社会的な構築を含んでいるという立場（構築主義）から、ナラティブとしてのライフストーリーと事実としてのライフヒストリーとを区別し、①テクストから自伝的ナラティブを選び出す、②選び出したナラティブからライフストーリーを再構成する、③事実に基づいてライフヒストリーを再構成する、④個々のテクストを分節化し、解釈的に分析する、⑤ライフストーリーとライフヒストリーを比較対照する、という手続きをとっている[154～155]。

前者のナラティブ分析では、ナラティブ・インタビューにおいて事実確認を欠く場合にはデータの信憑性が低下することが考えられ、後者の方法では個別の事例分析に多大の労力が費やされるために、比較する事例が限定される危険性があり、その場合には転用可能性が低下すると考えられる。

⑹　客観的解釈学

客観的解釈学は、発話や行為に対する当事者の「主観的意味」と「客観的意味」を基本的に区別し、テクスト

の分析を複数の研究者で「客観的に」行なうことに特徴があり、①分析する発話や行為とその一般化レベル（個人・制度的なコンテクスト・人類一般など）を定義する、②発話や行為が埋め込まれた外在的なコンテクストを分析する、③発話や行為の客観的コンテクストを再構成する、④発話や行為を行なうことによって当事者の役割が確立される過程を分析する、⑤発話や行為の言語学的特徴を特定する、⑥発話や行為が一般的なコミュニケーションの形式として他のコンテクストで使用されるかを検討する、⑦発話や行為が使用される、より一般的な状況を解明する、⑧一般的なコミュニケーションの形式と状況にかかわる仮説を他のテクストで検証する、という手順を踏む[156]。

客観的解釈学は、研究者によるトライアンギュレーションが前提とされ、信憑性が高められているが、テクストの分析に多大な時間がかかるために一事例の研究で終ってしまうことが多く、転用可能性の低下することが考えられる。また、方法論としては未確立で、各研究者のアート（技）としての部分が多く、確実性も現状では高くないと考えられる。

Ⅴ　おわりに

質的研究は以上検討してきたように、その概念や評価方法について統一的な考え方が確立されていないが、文献的検討を踏まえて、①研究対象の一つひとつを事例として重視する、②事例をその存在するコンテクストから切り離さない、③事例を事例自身の表現する（あるいはした）テクストによって記述する、④テクストの意味を研究者が研究対象の内面に入り込んで解釈し、理解する、と暫定的に概念規定すると、人間を対象としたヒューマンサービスの領域、とりわけ看護領域の実践活動と親和性の高い研究方法であると言え、このことは Holloway I と Wheeler S も指摘している[157]。すなわち、臨床看護や地域看護の実践の場面においては、①患者や住民のひとり一人を大切に扱い、②その表現する訴えや要望を受け止め、③それらの表現の背景にある文化的あるいは地域社会的コンテクストを理解し、④ケアや指導を実践し、⑤患者や住民の満足度に基づいてそれらの実践を評価する、からである。したがって、看護の日常的な実践は、本論で提案した確実性、信憑性、転用可能性、現実との関連性という四つの評価基準を満足するならば、質的研究として展開できる領域であると考えられる。もちろん、事例を重視するということは量的研究にもまして倫理的配慮[158] が重要なことは言うまでもないが、各方法において固有に必要な倫理的配慮について検討できなかった。

引用文献

１）萱間真美、他：Grounded Theory Approach を用いた看護研究の実際―データを用いたコーディングの実際―．第20回日本看護科学学会学術集会講演集：348、2000．

２）安梅勅江、他：看護研究におけるグループインタビュー法の活用―科学的根拠にもとづく質的研究法の展開―．第２１回日本看護科学学会学術集会講演集：377、2001．

３）Flick U：QUALITATIVE FORSCHUNG．1995．小田博志、他訳：質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論．p3、春秋社、2002．

４）奥田道大：データ蒐集の技法（Ⅱ）―事例的調査法―．福武直、松原治郎編：社会調査法．東京、有斐閣、pp77－80、1967．

５）見田宗介：「質的」なデータ分析の方法論的な諸問題．社会学評論、15(4)：79－80、1965．

６）苅谷剛彦、他：研究理論と調査法―「質対量」論争を越えて（座談会）．北澤毅、古賀正義編：〈社会〉を読み解く技法―質的調査法への招待．東京、福村出版、pp177－178、1997．

７）佐藤郁哉：フィールドワーク―書を持って街へ出よう．東京、新曜社、p22、1992．

８）Grbich C: Qualitative Research in Health An Introduction.1999.上田礼子、上田敏、今西康子訳：保健医療職のための質的研究入門．pp5-8、医学書院、2003．

９）見田宗介：現代日本の精神構造．東京、弘文堂、p171、1965．

10）Lazarsfeld PF：QUALITATIVE ANALYSIS: Historical and Critical Essays．1972．西田春彦、他訳：質的分析法、岩波書店、1984．

11）Everitt BS:THE ANALYSIS OF CONTINGENY TABLES．1977、山内光哉監訳：質的データの解析―カイ二乗検定とその展開、新曜社、1980．

12）Upton GJG：The Analysis of Cross-tabulated Data．1978．池田央、他訳：アプトン　調査分類データの解析法．朝倉書店、1980．

13）川端亮：社会学調査の歴史―計量的方法を中心に．高坂健次、厚東洋輔編：講座社会学１理論と方法．東京、東京大学出版会、pp263－264、1998．

14）谷泰編：文化を読む：フィールドとテクストのあいだ．京都、人文書院、1991．

15）中野卓、桜井厚編：ライフヒストリーの社会学．東京、弘文堂、1995．

16）須藤健一編：フィールドワークを歩く―文科系研究者の知識と経験―．京都、嵯峨野書院、1996．

17）山田勇：フィールドワーク最前線―見る・聞く・歩く―．東京、弘文堂、1996．

18）箕浦康子編：フィールドワークの技法と実際―マイクロ・エスノグラフィー入門―．京都、ミネルヴァ書房、1999．

19）木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプロー

チ―質的実証研究の再生．東京、弘文堂、1999．
20）好井裕明、桜井厚編：フィールドワークの経験．東京、せりか書房、2000．
21）中村尚司、広岡博之：フィールドワークの新技法．東京、日本評論社、2000．
22）山中速人編：マルチメディアでフィールドワーク．東京、有斐閣、2002．
23）桜井厚：インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方．東京、せりか書房、2002．
24）佐藤郁哉：フィールドワークの技法―問いを育てる、仮説をきたえる．東京、新曜社、2002．
25）Babbie ER：SURVEY RESEARCH METHODS（2nd）．California、Wadsworth Publishing Co.，1997．
26）Schatzman L，Strauss AL：FIELD RESEARCH: Strategies for a Natural Sociology．1973．川合隆男監訳：フィールドリサーチ―現地調査の方法と調査者の戦略―、慶應義塾大学出版会、1999．
27）Krippendorf K: CONTENT ANALYSIS: An Introduction to Its Methodology．1980．三上俊治、他訳：メッセージ分析の技法　「内容分析」への招待、勁草書房、1989．
28）Plummer K：Documents of Life．1983．原田勝弘、他監訳：生活記録の社会学―方法としての生活史研究案内―、光生館、1991．
29）Maanen JV：TALES FROM THE FIELD:ON WRITING ETHNOGRAPHY. 1988. 森川渉訳：フィールドワークの物語―エスノグラフィーの文章作法―、現代書館、1999．
30）Chenitz WC，Swanson JM：From Practice to Grounded Theory．1986．樋口康子、稲岡文昭監訳：グラウンデッド・セオリー―看護の質的研究のために―．医学書院、1992．
31）Emerson RM，Fretz RI，Show LL：Writing Ethnographic Fieldnotes．1995．佐藤郁哉、他訳：方法としてのフィールドノート―現地取材から物語り作成まで．新曜社、1998．
32）Vaughn S，Schumm JS，Sinagub JM：FOCUS GROUP INTERVIEWS IN EDCATION AND PSYCHOLOGY．1996．井下理監訳：グループ・インタビューの方法．慶應義塾大学出版会、1999．
33）Bertaux D:LES RECITS DE VIE:PERSPECTIVE ETHNOSOCIOLOGIQUE.1997.小林多寿子訳：ライフストリー―エスノ社会学的パースペクティブ―．ミネルヴァ書房、2003．
34）Emerson RM(eds):Contemporary Field Research: Perpectives and Formulations（2nd）．Illinois，Waveland Press,Inc.，2001．
35）宝月誠、他：社会調査．東京、有斐閣、1989．
36）東京大学医学部保健社会学教室編：保健・医療・看護調査ハンドブック．東京、東京大学出版会、1992．
37）大谷信介、他編：社会調査へのアプローチ―論理と方法―．京都、ミネルヴァ書房、1999．
38）東京大学医学部保健社会学教室編：前掲、p25．
39）高坂健次、与謝野有紀：社会学における方法．高坂健次、厚東洋輔編：講座社会学１理論と方法．東京、東京大学出版会、pp209－212、1998．
40）今田高俊：リアリティと格闘する―社会学研究法の諸類型．今田高俊編：社会学研究法・リアリティの捉え方．東京、有斐閣、pp4－8、2000．
41）Strauss A，Corbin J：Basics of Qualitative Research:Grounded Theory Procedures and Techniques．1990．南裕子監訳：質的研究の基礎―グラウンデッド・セオリーの技法と手順．pp11－12、医学書院、1999．
42）Flick U：前掲、pp11－19．
43）Leininger MM（eds）：Qualitative Research Methods in Nursing．1985．近藤潤子、伊藤和弘監訳：看護における質的研究．pp6－9、医学書院、1997．
44）Polit DF，Hungler BP：NURSING RESEARCH :Principles and Methods（3rd）．1987．近藤潤子監訳：看護研究―原理と方法．P266、医学書院、1994．
45）Patton MQ：How to Use Qualitative Methods in Evaluation．p7，California，SAGE Publications, Inc.，1987．
46）Holloway I，Wheeler S：Qualitative Research for Nurses．1996．野口美和子監訳：ナースのための質的研究入門．pp3－9、医学書院、2000．
47）Pope C，Mays N（eds）：Qualitative Research in Health Care（2nd）．1999．大滝純司監訳：質的研究実践ガイド―保健・医療サービス向上のために．pp11－12、医学書院、2001．
48）Cohen MZ：Introduction to Qualitative Research．In：LoBiondo-Wood G，Haber J(eds)：Nursing Research:Methods, Critical Appraisal, and Utilization（5th）．Missouri, Mosby,Inc.，p126，2002．
49）Liher PR，Marcus MT：Qualitative Approaches to Research．In:LoBiondo-Wood G，Haber J（eds): Nursing Research:Methods, Critical Appraisal, and Utilization（5th）．Missouri, Mosby, Inc.，p140，2002．
50）Norwood SL:Research | Strategies for advanced practice nurse．pp46－47，New Jersey，Prentice-Hall,Inc.，2000．
51）舟島なおみ：質的研究への挑戦．P24、東京、医学書院、1999．
52）高坂健次、与謝野有紀：前掲、p209．
53) Grbich C: 前掲、pp52－61．

54）Flick U：前掲、pp271－293.
55）Flick U：前掲、p273.
56）Pope C，Mays N（eds）：前掲、pp89－90.
57）Flick U：前掲、p273.
58）Flick U：前掲、pp274－275.
59）瀬畠克之、阪本尚正：保健医療研究における質的研究の可能性－プロセスとしての質的分析の妥当性に関する検討－．民族衛生、68（付録）：126－127、2002.
60）Flick U：前掲、pp284－285.
61）Pope C，Mays N（eds）：前掲、pp90－92.
62）Flick U：前掲、pp282.
63）Flick U：pp283－284.
64）Pope C，Mays N（eds）：前掲、p92.
65）Flick U：前掲、p285.
66）Flick U：前掲、pp276－285.
67）Flick U：前掲、p282.
68）Flick U：前掲、pp282－283.
69）Flick U：前掲、pp276－277.
70）歴史学研究会編：事実の検証とオーラル・ヒストリー．東京、青木書店、1988.
71）Pope C，Mays N（eds）：前掲、p91.
72）Flick U：前掲、pp277－278.
73）Flick U：前掲、p277.
74）Holloway I，Wheeler S：前掲、pp175－176.
75）Flick U：前掲、pp287－292.
76）Flick U：前掲、pp287－288.
77）Flick U：前掲、pp288－289.
78) Speziale HJS：Evaluating Qualitative Research. In：LoBiondo-Wood G，Haber J（eds）：op.cit.，p 168.
79）Flick U：前掲、pp285－286.
80）Flick U：前掲、pp276－277.
81）Speziale HJS：op.cit.，p168.
82）Holloway I，Wheeler S：前掲、p177.
83）Pope C，Mays N（eds）：前掲、pp90－93.
84）Strauss A，Corbin J：前掲、pp265－272.
85）瀬畠克之、他：質的研究の背景と課題－研究手法としての妥当性をめぐって－．日本公衛誌、48（5）：341－342、2001.
86）片桐隆嗣：質的調査の技法．北澤毅、古賀正義編：前掲、pp24－25.
87）Flick U：前掲、p95.
88）濱嶋朗、他編：社会学小辞典［新版］．東京、有斐閣、p303、1997.
89）Flick U：前掲、pp101－102.
90）Flick U：前掲、pp109－113.
91）Flick U：前掲、pp114－115.
92）Flick U：前掲、pp115－117.
93）片桐隆嗣：前掲、pp27－28.
94）Flick U：前掲、pp123－131.
95）大出春江：『口述の生活史』作品化のプロセス．中野卓、桜井厚編：前掲、pp87－89.
96）桜井厚：前掲、pp107－109.
97）Flick U：前掲、p143.
98）Vaughn S,Schumm JS，Sinagub JM：前掲、pp7－8.
99）安梅勅江：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法－科学的根拠に基づく質的研究法の展開．pp35－37、東京、医歯薬出版、2001.
100）安梅勅江：前掲、pp84－111.
101）Flick U：前掲、pp147－157.
102）佐藤郁哉（1992）：前掲、pp129－132.
103）Flick U：前掲、p177.
104）佐藤郁哉（1992）：前掲、pp133－134.
105）Holloway I，Wheeler S：前掲、pp66－67.
106）Flick U：前掲、pp179－182.
107）佐藤郁哉（1992）：前掲、pp180－185.
108）Flick U：前掲、pp183－184.
109）Holloway I，Wheeler S：前掲、p65.
110）春日キスヨ：介護の社会学．pp183－225、東京、岩波書店、2001.
111）Holloway I，Wheeler S：前掲、pp137－150.
112）箕浦康子：フィールドワークと解釈的アプローチ．箕浦康子編：前掲、p3.
113）Flick U：前掲、pp190－192.
114）Wang CC，et al：Photovoice as a tool for participatory evaluation: The community's view of process and impact．Journal of Contemporary Health，4(3)：47－49，1996.
115）岡村純、金城芳秀:沖縄県離島におけるPhotovoiceの試み－参加型 Needs Assessment としての応用－．沖縄県立看護大学紀要、3：101－106、2002.
116）Flick U：前掲、pp192－193.
117）片桐隆嗣：前掲、pp34－35.
118）片桐隆嗣：前掲、p38.
119）Flick U：前掲、pp194－195.
120）片桐隆嗣：前掲、pp40－41.
121）Plummer K：前掲、pp23－54.
122）Holloway I，Wheeler S：前掲、pp69－71.
123）片桐隆嗣：前掲、pp41－42.
124）Flick U：前掲、p220.
125）Flick U：前掲、p220.
126）Strauss A，Corbin J：前掲、pp59－71.
127）Strauss A，Corbin J：前掲、pp77－81.
128）Strauss A，Corbin J：前掲、pp98－101.
129）Strauss A，Corbin J：前掲、pp101－110.
130）Flick U：前掲、pp227－228.
131）Strauss A，Corbin J：前掲、pp120－121.
132）Strauss A，Corbin J：前掲、pp196－197.

133）Strauss A，Corbin J：前掲、pp184－187.
134）儘田徹：社会学の質的調査研究法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ．保健医療社会学論集、９：50－51、1998.
135）森岡崇：グラウンデッド・セオリーをめぐって（解説）．Strauss A，Corbin J：前掲、pp277－279.
136）水野節夫：調査研究プログラムとしてのデータ対話型理論の可能性（訳者解説）．Glaser BG，Strauss AL：The Discovery of Grounded Theory：Strategies for Qualitative Research．1967．後藤隆、他訳：データ対話型理論の発見－調査からいかに理論をうみだすか．pp370－372、新曜社、1996.
137) Grbich C: 前掲、pp159－160.
138）Flick U：前掲、p230.
139）山本則子、他：グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス．東京、文光堂、2002.
140）Flick U：前掲、pp230－231.
141）木下康仁：前掲、pp126－135.
142）高城和義：パーソンズ　医療社会学の構想．pp5－6、東京、岩波書店、2002.
143) Grbich C: 前掲、pp160－161.
144）Flick U：前掲、pp231－235.
145) Krippendorf K: 前掲、pp7－10.
146）Holloway I，Wheeler S：前掲、p197.
147）Flick U：前掲、pp237－238.
148）Flick U：前掲、pp238－240.
149）Krippendorf K: 前掲、pp168－183.
150）Flick U：前掲、p246.
151）Holloway I，Wheeler S：前掲、p162.
152）Flick U：前掲、pp247－249.
153）Flick U：前掲、p252.
154）Bertaux D：前掲、pp60－67.
155）Flick U：前掲、pp253－254.
156）Flick U：前掲、pp256－258.
157）Holloway I，Wheeler S：前掲、p3.
158）Holloway I，Wheeler S：前掲、pp41－53.

Journal of Okinawa Prefectural College of Nursing No.5 March 2004.

An Introduction of Qualitative Research to Nursing

— From The Viewpoint of Social Research Methodology—

Jun OKAMURA, M.H.S.[1)]

In human sciences, much attention is now focused on qualitative research, but there is a diversity of definitions of *qualitative research* and its critera. Then, in order to introduce qualitative research to nursing from the viewpoint of social research, literature reference discussion has been conducted.

The results of this discussion revealed that qualitative research in nursing should be considered as follows:

1) It can be defined expediently as the research, in which each subject is valued as a case, the case is not taken out of the context where it is present, the case is described by the text that each subject represents, and researchers interpret the meanings of the text in vivo code.

2) It is essentially similar to nursing practice, in which each client is importantly treated as an individual, the wants that each client presents are met, the cultural and community context of their wants is understood, caring and intervention is given, and their satisfaction with the practice is evaluated.

3) It can be evaluated from the standpoint of four criteria :
- *dependability*, which means that any reader of the article can trace the process of the researcher's text interpretation and they can double-check similar cases for purposes of comparison;
- *credibility*, which means that his/her interpretation of the text can be credited in a context;
- *transferability*, which means that his/her interpretation of the text in a context can be transferred to another context; and
- *relevance*, which means that its results can contribute to the solution of clinical problems.

Key words: qualitative research, dependability, credibility, transferability, relevance

1) Okinawa Prefectural College of Nursing